

紙ふうせん

平本節子

「ポーン、ポーン」

ちっちゃなミコちゃんが、紙ふうせんをうっている音が、お蔵の中から聞える。

「ポーン、ポーン」

その頃私は、母の実家がある東京にほど近い、小さな城下町に疎開していた。

この街の中心に、蔵造りの家が並んで建っている通りがある。母の実家はその中央にあり、江戸時代には油を、明治時代以降は時計、貴金属を商う商家だった。

私は太平洋戦争が始まった昭和一六年、春爛漫の四月に東京に生を受けた。父は新聞記者をしていた。

私の記憶にはないが三年ほどは東京も穏やかなようであった。が、次第に戦局は厳しくなり、終戦の一年前、この城下町へ疎開したのだった。私が三才の時のことである。

ミコちゃんは初めて会った従妹だ。

終戦の年の何月であったかは憶えていないが、満州から家族と共に引き揚げて来た。

ミコちゃんのお母さん、美子は母の妹。私にとっては叔母に当たる。

その美子叔母の姿がない。気が付くと、何と白い布に包まれ、遺骨となって叔父、正雄叔父の胸に抱かれているではないか！

やっとの思いで日本へ帰って来たというのに、せっかく両親の待つ実家へ帰って来たというのに……。

「こんな姿になってしまった……」

祖父母をはじめ皆、泣き崩れた。

私はぼんやりとその光景を見ていた。

正雄叔父は当時の帝国大学を卒業後、国鉄へ入社、それから「満鉄」へ出向となり、叔母を伴い満州へ渡った。

それがいつのことであったか、私は知らない。

「満鉄」とは南満州鉄道の略称で、日露戦争の勝利で得た東清鉄道の支援をもとに、一九〇六年に設立された、半官半民の国策会社であった。長春〜旅順間の鉄道事業を主軸

として、炭鉱業他諸工業を営んでおり、終戦の年まで続いた。

当時新京（現在の長春）と呼んでいた首都に住んでいた彼等は、叔父が官立大学出身であったためか、好待遇で良い暮らしをしていたという。そして三人の子供にも恵まれた。

ところが一九四五年八月九日、ソ連軍が日ソ不可侵条約を破り、満州国境から怒涛のように攻め入って来たのである。

当時一五五万人いた民間邦人は、全財産を失い、多くの命を亡くした。その逃避行は過酷極まりないので、多くの書物になっている。

叔母はソ連軍の攻撃があった大混乱の時でも、逃避行の時でもなく、その前に病で亡くなったそう。だからすっかり遺骨を持ち帰れたのだろう。あの混乱の最中の死であれば、遺骨はないはずである。

異国の地で三人の子を産み育て、その子供達を置いて死に逝く叔母の気持ちはいかばかりであったことか！

日本へ帰れたかったろう！ 両親に一目会いたかったろう……。

私は「美子」という名前の通り、美しかったという叔母に会ったことはない。

満鉄の要職にあった叔父一家は、後に私達が知ることになる悲惨な逃避行とは違っていたらしい。けれど、ミコちゃんは夜になると、

「こわいよー。ロスケがくる！」

と、寝言を言って怯えた。やはり恐ろしい目に遭っていたのだろう。

その時、年上の男の子シゲちゃんは九才、ミコちゃんは三才、下のヨウちゃんはまだ一才だった。

シゲちゃんは多感な年頃だったので、母を失い、ソ連軍の攻撃による大混乱を経験し、心に受けた傷は大きかったのか、口数の少ない気難しい子供であった。

なぜ妻の実家を頼って来たのだろうか？

叔父は広島出身なのである。やっと日本へ帰り着くと、故郷は全滅。両親も家も友人も誰もいなくなってしまったのだ。頼れるのは妻の実家しかなかったのである。

祖国は敗戦、妻を失い、故郷も両親も失い、亡き妻の実家を頼らざるしかない、彼の心情を思うと切ない。

一ヵ月ほどで叔父は国鉄へ復帰し、復興のため、一人東京へ戻った。子供達は祖父母が

預かり、母が面倒を見た。

突然現れた従兄妹達は、一人っ子の私にとっては嬉しく、共に暮らす日々は楽しかった。そして得難い経験をすることになる。

彼等の出現によって、私の立場は一気に地に落ちた。

今までは大人の中でたった一人だった子供の私は、チャホヤされ甘やかされ放題だったが、あの日以来、母を亡くした可哀想な子供達に同情が集まった。大人達に囲まれ、注目を浴びる彼等を見て、妬ましい！という感情を、私は初めて知った。

ある日私とミコちゃんは、祖母から百円（今の価値に換算すると千円位）をもらって、おもちゃ屋へ行った。

当時この街に、おもちゃ屋は一軒しかなかった。

私は店に入るなり直ぐ、目に留まったのが「ベティちゃん」の付いた赤いバッグ！チェーンのハンドルが付いている。こんなのは初めて見た。即、

「これくささい！」

というなり腕に下げた。真っ赤なハンドバッグだ。

当時子供用のハンドバッグなどというものは、見たこともない。それもアメリカで流行っていた「ベティちゃん」が付いている。

ベティちゃんは四角い顔で黒髪がカールしておでこにかかり、目がまん丸で可愛いのが、美人ではない。けれどとても印象的で、今もはっきり憶えている。

わたしの買物は店へ入った瞬間に決まった。ミコちゃんはゆつくりとおもちゃを一つ一つ手にとって見ていた。とても時間がかかったように思う。そして、やっと五、六個の品を選んだ。二人はそれぞれに満足し、嬉しくてスキップしながら帰った。

すぐに祖母に見せた。私は得意満面で流行最先端の「ベティちゃん」のバッグを、ミコちゃんは買ってきたおもちゃをずらりと並べて、

「これはお兄ちゃんでしょう」

「これはヨウちゃんでしょう」

と言って分けた。

「ミツコのは？」

と祖母が聞くと、

「わたしのはこれ！」

と言って紙ふうせんを一つ取り出した。三つ一組だったのを、一つだけ分けてもらったという。

「フー、フー」

とミコちゃんが息を吹き込むと、紙ふうせんはパリパリッと、小さな音を立てて膨らんでいった。そしてミコちゃんは小さな手の上にふうせんを乗せ、

「ポーン、ポーン」

とうった。

「ミツコはなんていい子なんだろう。自分は紙ふうせん一つで、お兄ちゃんと弟に自分より何倍も高い物を買って……」

祖母は涙を流しながら、ミコちゃんを抱きしめた。

「なんでミコちゃんばかり褒められるの？ どうしてなの？ どうして？」

私は誰かに責められたわけではないのに、悪いことをしたような気になった。

「ベティちゃんなんかキライ！」

私は、ワツと泣き出してしまった。

ベティちゃんは涙でくもり、持つてはいけないような気がした。それ以来見るのも嫌になった。あんなに気に入ったのに……。

「お母さん、子供にあんなにたくさんお金を持たせないでください。教育上良くありません。セツコは贅沢ばかり覚えて……」

母が祖母をたしなめる声を聞いて、私は更に「青菜に塩」のようにしょんぼりとしてしまった。

半年後、三人の従兄妹は東京へ行ってしまった。私に大切なことを教えて……。

「ポーン、ポーン」

この音を、私は決して忘れることはないだろう。